

最優秀賞

コーヒーカバーの手紙

福岡大学経済学部3年 岡ちひろ

夢に見た大学生活、いざスタート！そうはさせるか！と追い討ちをかけるように、コロナウイルスが流行しだした。入学式はもちろん中止、全てがオンライン授業、先生や友達の顔も見えず、本当に私は大学生か？と何百回も思った。人と話すのが大好きな性格なので、せっかくならと人数が多い大学を選んだのに、つながりのかけらもない毎日だった。

そんななか、私はある日の夕方、高速バスに乗る機会があった。バスは乗客を乗せて、出発した。当たり前が始まる運転手の車内アナウンス。柔らかな落ちついた声、男性の声だった。少し眠たかったはずなのに、思わず聞き入ってしまった。なぜなら、運転手さんがマニュアル通りの台本を読み上げているのではなく、自ら考えた言葉で話しているように聞こえたからだ。文の量はいつもの三倍近くあっただろうか。とても丁寧に言葉を選んでいて、乗客に向けた素晴らしい心配りだと思った。アナウンスは終わり、静かに揺れるバスの中、私の中のワタシはものすごくお喋りになっていた。顔もまともに見えていないが、私は運転手さんにこのふわっと温かくなった気持ちを伝えたくなった。そうだ、メモを渡そう。手元に何もメモ紙がなかった。悩んだ結果選んだのは、カフェで買ったコーヒーの手持ちのカ

バー。今の気持ちをぎゅうぎゅう詰めに書いた。「運転手さんへ、アナウンス素敵でした……」

コロナのせいでつながりなんてかけらもない、と思っていた。けれど、アナウンスのおかげで人と人とのつながりをこんなに大切にしたい、誰かのためにと一生懸命に尽くそうとしている人がいる事に気づけた。私もそんな人になってみせる。

バスを降りるときに、少し緊張しながら「あの、これを」と言っ

(審査評)文章を読んで、心が温まる。ほっとする。「人生、そんなに悪いことばかりじゃないよ」と思わせてくれる。それを存分に感じさせてくれる内容でした。コロナ禍でどんよりと落ち込んだ気持ち、バスの中の様子、そこに流れる運転手さんのアナウンス。自分もこの情景の中にいるかのようです。その景色が、気持ちが、コーヒーカバー一点に凝縮されていく。まるで、言葉のお守りを手にしたような感覚が読後に残りま

した。マニュアル通りではない言葉の大切さ。そしてお礼を伝える気持ち。春日を浴びているような心地よい文章に酔いしれました。

ひきたよしあき